



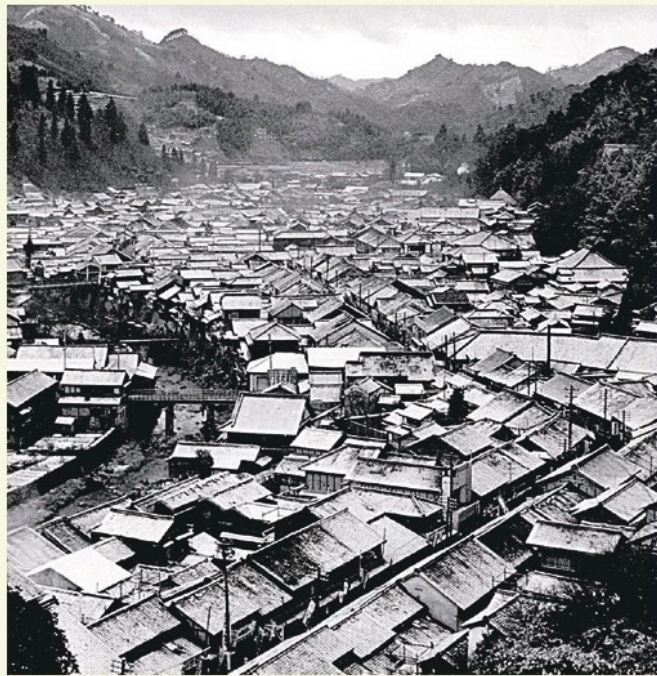
伊那街道の中継拠点として
栄えた商家の町並み

足助

あすけ

重要伝統的建造物群保存地区

町並み散策ナビ



●観音山から見た町並み（昭和初期）

足助の町並みの歴史

足助の町並みは、尾張・三河から信州を結ぶ伊那街道（中馬街道）の重要な中継地にあたり、物資運搬や庶民通行の要所として栄えた商家町です。重要な交易物であった塩はここで詰め替えられ、「足助塩」「足助直し」と呼ばれました。町並みの成立は定かではありませんが、安永4年（1775）の大火で町並みの大部分は焼失してしまいました。大火直後から町は再建され、今も町並みには江戸時代後期から明治末までに建てられた建物が数多く残っています。大正期や戦後の建物でも伝統的な町家の形式を踏襲するものが多く、現在まで古い町並みの景観が保たれてきました。

明治44年（1911）に国鉄中央線が開通すると、物資の輸送基地としての機能は次第に衰退しますが、その後も足助は東加茂郡の中心として歩み続けました。



●連続する妻入家屋

足助の町家建築の特徴

安永4年（1775）の大火後に復興された町並みは、漆喰塗り2階建ての町家で、防火を意識した瓦葺きが普及し、屋根勾配が比較的急になっています。1階には庇を設け、藪戸の痕跡を残す家が多く、商家町の特徴を示しています。



敷地利用と家並みの特徴

足助の町並みは、南北を山で挟まれた足助川の谷筋に沿う段丘上に広がっています。街道沿いでは、短冊状の敷地に主屋を間口いっぱい建て、その背後に離れ座敷や土蔵などが密に配置されています。限られた敷地に用地を確保するために、建物は切土や盛土による造成地や幾段にも築かれた石垣の上に建てられ、特徴的な景観をつくり出しています。

